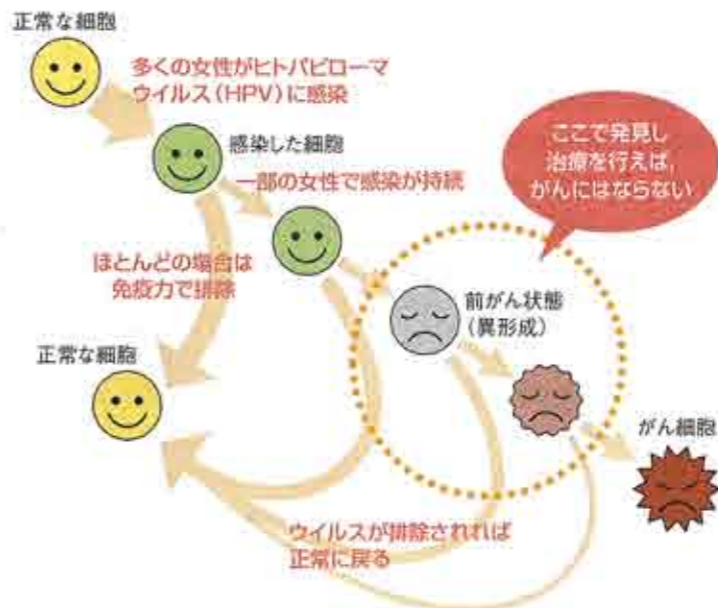




監修：今野 良 医師
自治医科大学附属さいたま医療センター
産科婦人科教授

20~30代の若い女性に増えている子宮頸がんは、
検診さえしっかり受ければ100%予防できるんです。
最近、注目されているHPV検査とはどのような検査か？
子宮頸がんにならないためにはどうすればよいのか？
子宮頸がん予防の最新情報について紹介します。

子宮頸がんは 100%予防できる 検診の最新情報と今後の課題



■HPVの電子顕微鏡写真



HPVは性体験のある女性の50~80%が一度は感染するウイルスだといわれている。つまりHPV感染は、世界で最もありふれたSTI(Sexually Transmitted Infection, セックスを介する感染)である

写真提供：グラクソ・スミスクライン株式会社

図1 正常な細胞が子宮頸がんになるまで

4月9日(子宮の日)に、セミナー「子宮頸がんは100%予防できる」が開催されました。

女優の洞口依子さんは、子宮頸がんの手術を受けた闘病体験をもとに、昨年出版した『子宮会議』のなかから、告知を受けたときの驚愕や、抗がん剤治療や転移時の体験などの実体験に基づく箇所を朗読。そして、「検診により100%近く子宮頸がんを予防できるにもかかわらず、

それが認知されていないために検診にも行かない人が多くいます。自分自身と同様の境遇に陥ることのないよう強く希望しています」と話しました。

がんになる前の発見で
100%予防でき
妊娠や出産もOK



子宮頸がんは世界で二番目に多く発生している女性特有のがんであり、年間に約50万人に発生し、約30万人が死亡しているといわれています。わが国では年間に約8,000人に発生し、約2,500人が亡くなっています。

「ただ、子宮頸がんは発生原因などが解明されており、検診さえ定期的に受ければ、ほぼ100%予防できるんです。これは子宮頸がんの大きな特徴として、がんになる前(前がん病変)の段階で検査で発見することができるためです。また、前がん病変で発見されれば、円錐切除という低侵襲の治療で完治し、子宮の温存も可能です。治療後の妊娠や出産にもほ

とんど影響はありません」(今野医師)

一般にがん検診は「がんの早期発見・早期治療」のためといわれます。しかし子宮頸がんに関しては、これは正しい認識ではありません。子宮頸がん検診はがんの発見ではなくがんの予防のために受ける検診なのです。

子宮頸がんの原因は
HPV感染と解明



子宮頸がんの原因は、その99%以上がHPV(Human papillomavirus, ヒトパピローマウイルス)感染であることが明らかにされています。

HPVはありふれたウイルスであり、性体験のある女性の50~80%が一度は感染するウイルスだといわれています。つまり、性体験のある人には、その回数、人数、期間にかかわらず、誰でも感染する可能性のあるウイルスであり、多くの女性は10~20代初期に感染するとされています。

感染しても多くの場合は、本人の免疫

力によりウイルスは体外へ排除されます。しかし、ウイルスを排除できず感染が長期化(持続感染)してしまうケースもあります。子宮頸部の細胞に変化(異形成)を生じ、長い年月を経て子宮頸がんへと進行する危険性があり、注意が必要です(図1)。

HPVは現在、100タイプ以上に分類され、そのうちの30タイプ以上が生殖器に感染します。現時点では、子宮頸がん発生の高リスクタイプのHPVとして10数種類が確認されています。

「高リスクタイプのHPVに女性が感染すると、約5~10%の人が持続感染を起こします。そして、軽度異形成という変化を起こし、やがて前がん病変である高度異形成へ進み、数年以上を経てがん化します。ただし、高リスクタイプのHPVに感染してもすべての人が子宮頸がんになるわけではありません。がんに結びつく確率は1,000分の1程度、つまり、0.1%に過ぎません」(今野医師)

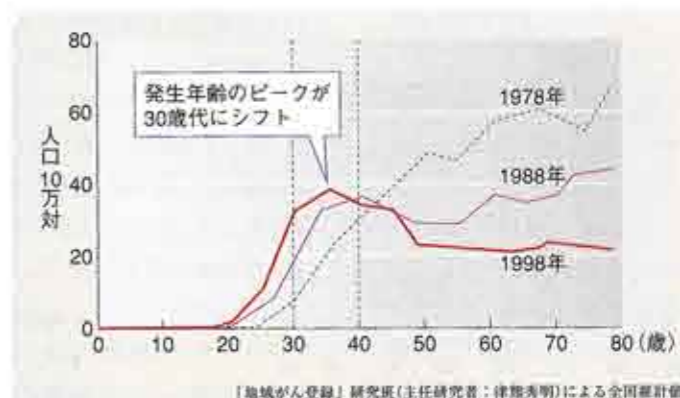


図2 子宮頸がん発生の年齢による変化

子宮頸がんによる死亡率が
20~30代で顕著に上昇

わが国の子宮頸がんの発生年齢層のピークは、1988年の40代から1998年に30代へとシフトしました(図2)。とくに、最近の20~30代の発生率の増加は顕著であり、死亡率も若年層で急激に上昇しています。

「以前、若い人に子宮頸がんが多くなっ

た背景には、性の乱れが原因と、まことしやかに流布されましたが、これは大きな間違い、性行為を開始する年齢が早まると、HPV感染も早くなり、その結果、子宮頸がんを発生する人の年齢も若くなったと考えるべきです。子宮頸がんは検診で予防できるがんです。検診を受診せずに無為にがんを進行させ、若くして子宮を失ったり、命を落とす女性が増えているのは残念でなりません」(今野医師)



4月9日のセミナーで著書『子宮会議』(小学館)を朗読する洞口依子さん